

# 令和6年度 「平和への旅」青少年派遣事業報告書



日立市・「平和への旅」青少年派遣事業実行委員会

## はじめに

1945（昭和 20）年 8 月 15 日に太平洋戦争が終結してから 79 年が経過しました。日本では、平穏な日々が続いておりますが、世界に目を向けると、ロシアによるウクライナ侵攻が現在も続いているほか、イスラエルとハマスの戦闘が長期化している中東情勢も、世界中に不安と緊張を与え続けております。

戦争を体験した方々が高齢となる中で、悲惨な戦争について振り返る機会は少なくなってきました。79 年前に犠牲となった多くの尊い生命を礎にして、現在の「平和」が成り立っていることを忘れてはなりません。この「平和」を守り続けていくためにも、私どもには未来を担う子どもたちに、悲惨な戦争の記憶を正しく伝えていく義務があると考えています。

日立市では、青少年への平和啓発を目的として、平成 7 年から「平和への旅」青少年派遣事業を実施しています。10 回目を迎えた今回は、市内中学生 17 人を被爆地である広島市に派遣し、現地での活動や体験を通して戦争の悲惨さについて学び、平和の尊さについて深く考えて参りました。

今回の事業も前回と同様、2 か年の事業とし、1 年目には、日立市の戦災についての学習や「日立市戦没者追悼式」への参加など 3 回の事前研修を行いました。2 年目には、7 月に 1 度研修を行った後、令和 6 年 8 月 5 日から 7 日の 3 日間で広島市への派遣研修を行いました。

連日、猛暑日が続く厳しい暑さの中、広島平和記念式典への参加や広島平和記念資料館の見学、班別のフィールドワークなど、充実した派遣研修を実施することができました。

この報告書には、派遣生が身をもって学んだ成果が掲載されています。平和な社会を実現するためにはどのようなことが必要なのか、一人ひとりが考えた思いが伝わる報告書となっています。派遣生には、平和な社会を実現していく次世代のリーダーとしての活躍を大いに期待しています。

結びに、先生及び、保護者の皆様並びに関係者の皆様の御理解と御協力をいただきましたおかげで、無事に本事業を実施できました。この場を借りて、感謝とお礼を申し上げます。

2024（令和 6）年 12 月

「平和への旅」青少年派遣事業実行委員会  
委員長 平子 剛之

## 核兵器廃絶・平和都市宣言

世界の平和と安全は、人類共通の願いである。

いま、国際的な核軍拡競争は、核戦争の危機を増大し、人類生存の恐怖となっている。

私たちは、再び「広島」「長崎」のあの惨禍を繰り返さないためにも、すべての国に対し、核兵器の廃絶と軍縮を求め、いかなる国の核兵器も許してはならない。

一瞬にして尊い命を奪い、財産を灰にしてしまったあの悲惨な戦争をいかなる理由があろうとも繰り返してはならない。

日立市は、日本国憲法の恒久平和の理念に基づき、核兵器の廃絶と人類永遠の平和を希求し、ここに「核兵器廃絶・平和都市」となることを厳粛に宣言する。

昭和60年12月24日

日 立 市

## 目 次

* 事業概要	P 1
* 研修日程	P 2
* 派遣生及び引率者名簿	P 3
* 研修記録	P 4
* 派遣生感想	P11
* 引率者感想	P28
* フォトギャラリー(研修の思い出)	P29
* 資 料 編	
・ 広島・長崎への原爆投下について	P31
・ <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">参 考</span> 日立市が受けた戦災について	P32

## 令和6年度「平和への旅」青少年派遣事業概要

### 1 目的

- (1) 本市の「核兵器廃絶・平和都市宣言」（昭和60年12月24日）に基づく平和啓発事業の一環として、市内各中学校の生徒を被爆地である広島市に派遣する。
- (2) 平和記念式典参加や原爆資料館等の見学を通じて、戦争の悲惨さと平和の大切さ、命の尊さについて学ぶ機会とする。
- (3) 派遣後に報告書を作成するほか、各学校で報告会を行うことにより、事業内容の共有を図り、各学校における平和教育の一助とする。

### 2 事業概要

- (1) 派遣日程 令和6年8月5日（月）～7日（水）（2泊3日）
- (2) 派遣先 広島県広島市 外
- (3) 派遣人数 20人（中学生17人、引率者3人）
- (4) 派遣内容
  - ア 平和記念式典への参加
  - イ ひろしま子ども平和の集い参加（被爆体験者講話等）
  - ウ フィールドワーク（グループ学習）等

### 3 研修会

	日 時	場 所	内 容
第1回	令和5年8月8日（火）	シビックセンター 101 会議室	日立市の戦災について 戦災体験者の講話聴講
第2回	令和5年10月27日（金）	日立市民会館	日立市戦没者追悼式への参加
第3回	令和6年3月27日（水）	市役所 多目的ホール	広島市の戦災について 広島市でのグループ活動の下調べ
第4回	令和6年7月29日（月）	市役所 多目的ホール	広島市での班別行動の計画策定 広島での行動確認
第5回	令和6年8月19日（月）	市役所 多目的ホール	派遣事業発表

### 4 「平和への旅」青少年派遣事業実行委員会委員（3人）

役 職	氏 名	所 属 等
委員長	平子 剛之	日立市学校長会副会長（助川小学校長）
監 事	青木 房子	教育委員会指導課長
委 員	菊池 誉	生活環境部長

## 研修日程

	期 日	時 間	内 容	備 考
令和5年度	8／8（火）	10:00 - 12:00	第1回研修会	シビックセンター101 会議室
	10／27（金）	10:00 - 11:30	第2回研修会	日立市民会館
	3／27（水）	10:00 - 12:00	第3回研修会	日立市役所多目的ホール
令和6年度	7／29（月）	10:00 - 12:00	第4回研修会	日立市役所多目的ホール
	8／5（月） 〔1日目〕	7:20	日立駅集合・出発	ひたち4号
		9:38	東京駅到着	
		10:12	東京駅出発	のぞみ23号、車内にて昼食(弁当)
		14:02	広島駅到着	
		15:45 - 17:15	碑めぐりガイド	
		18:00 - 19:00	夕食	五エ門 胡町本店(お好み焼き)
	8／6（火） 〔2日目〕	7:20	式典会場到着	平和記念公園
		8:00 - 8:50	令和6年広島平和記念式典参列	
		10:00 - 12:00	ひろしま子ども平和の集い参加	広島国際会議場
		13:00 - 14:00	昼食	ホテル内レストラン
		15:30 - 17:00	フィールドワーク	
		19:00 - 20:00	夕食	ホテル内レストラン
	8／7（水） 〔3日目〕	8:30 - 9:30	広島平和記念資料館見学	
		10:45	広島駅到着	お土産購入
		12:43	広島駅出発	のぞみ26号、車内にて昼食(弁当)
		16:25	品川駅到着	
		16:45	品川駅出発	ひたち21号
		18:30	日立駅到着・解散	
	8／19（月）	10:00 - 12:00	第5回研修会	日立市役所多目的ホール
	12月		報告書発行	
	随 時		各中学校での報告会	

## 派遣生名簿及び引率者名簿

### 1 派遣生 17 人（男子 8 人、女子 10 人）

班	役 割	氏 名	学年	性別	中学校	研修目標
A	班 長	妹尾 洸汰	2	男	十 王	戦争について学び、二度とくり返さないように、戦争の悲しさを知り、平和について考える。
	副班長	太田 采希	3	女	駒 王	
	記 録	坂東 陽	3	女	豊 浦	
	編 集	鈴木 悠華	3	女	キリスト	
	編 集	大森 琉生	3	男	滑 川	
	会 計	菊池 眞子	3	女	中 里	
B	班 長	関根 陽菜	3	女	日 立 一	広島で平和と命の尊さを学び伝えよう！
	副班長	樫村 拓哉	3	男	日 高	
	記 録	前田 凌助	3	男	台 原	
	編 集	木村 紗椰	3	女	平 沢	
	編 集	津田 寛太	3	男	坂 本	
	会 計	丸山 琴音	2	女	泉 丘	
C	班 長	小林 幸太朗	2	男	久 慈	原爆について学び、伝え、平和を未来に残そう！
	副班長	今橋 奈々	3	女	助 川	
	記 録	菊池 瑛太	3	男	多 賀	
	編 集	羽成 優奏	3	女	河 原 子	
	会 計	寺山 希々花	3	女	大 久 保	

### 2 引率者 3 人

所 属	氏 名	役職	性別	備 考
駒王中学校	佐藤 良子	教務主任	女	担当科目：数学
文化・国際課	高畠 友宏	主 幹	男	
文化・国際課	橋間 優深	主 事	女	



## 研修記録

### 第1回事前研修会【令和5年8月8日（火）】

研修始まりの日となります。皆さん、緊張の面持ちで、これから研修を共にするメンバーに挨拶をしました。

そして、研修の概要や日程を確認後、日立市の戦災やその被害について学びました。

最後に、日立市での戦災体験者である皆川直司さんに当時の様子をお話いただきました。戦災を体験された方の生の声に、派遣生一同真剣に耳を傾けていました。



初顔合わせ



事前研修会の様子

### 第2回事前研修会【令和5年10月27日（金）】

日立市戦没者追悼式に参加しました。代表者3名が壇上で「平和への誓い」を読み上げました。また、参加した派遣生は壇上で指名献花を行いました。

派遣生からは「被災した方々に思いを巡らせることができた」「戦争は2度と起こしてはいけない」という声があり、戦争の悲惨さ、平和の尊さを強く感じていました。



初めて班別で活動

### 第3回事前研修会【令和6年3月27日（水）】

いよいよ、広島での平和学習に向けた事前学習が始まりました。今回の研修からグループ分けを行い、班内での役割分担を決めました。

広島市の平和学習資料とDVDを使用して、広島市の戦災について学んだあとに、広島市の現地研修で訪れたい場所を班ごとに選定しました。



2年目となり話し合いもスムーズに

### 第4回事前研修会【令和6年7月29日（月）】

前回の研修で選定した場所を基に、2日目の班別行動を検討し、スケジュールを作成しました。広電電車(路面電車)での移動方法や、どの順番で見学して回るかなど派遣生同士で相談しながら決定しました。

最後に、広島市での日程や注意事項を確認して、最後の事前研修が終了しました。



### 日立駅出発

多くの保護者、先生方に見送られ、元気に出発しました。朝早くの出発にもかかわらず、車内では派遣生同士の楽しそうな話声が飛び交っていました。慣れない乗換えや座席への移動なども、協力してスムーズに行うことができていました。



ドキドキしながら出発



広島駅からホテルへ

### 広島駅到着

定刻で広島駅に無事到着しました。広島駅に降り立つと同時に、日立市とは比べ物にならない程の猛暑に驚きの声が上がっていました。

式典前日で路面電車も混雑している中、荷物を持って大人数での移動は大変であり、ホテルに着くころには疲労の色が伺えました。

### 碑めぐりガイド

ホテルへ到着後は、再度路面電車に乗り、平和記念公園へ向かいました。

各グループに碑めぐりガイドさんが付き、1時間半かけて平和記念公園内の記念碑を巡りながら、記念碑に込められた思いや原爆投下後の広島市の様子など、1つ1つ丁寧に説明をしていただきました。派遣生から自主的に質問するなど、平和学習への積極的な様子もみられました。

途中、屋内で案内する時間を設けるなど、暑さ対策への配慮をいただいたものの、長時間にわたる活動には厳しさを感じました。



碑めぐり案内の様子



爆心地の記念碑

### 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

平和記念公園のメイン会場にて広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列しました。原爆死没者名簿奉納に始まり、広島市議会議長による式辞、献花の後に平和の鐘に合わせて黙とうが行われました。

こども代表による平和への誓いでは、原爆投下後の広島市の悲惨な様子を想起させるような話を、派遣生たちはしっかりと受け止めていました。



手荷物検査を終え、メイン会場へ並ぶ様子



こども代表による平和への誓い

### 令和6年度「ひろしま子ども平和の集い」

平和記念式典参列後には、広島国際会議場に移動し、ひろしま子ども平和の集いに参加しました。第1部では、被爆体験者による講話と詩の朗読、第2部では中高生による平和への取り組み発表がありました。

同世代の平和への取り組みを知り、派遣生たちは自分たちにできることは何かを考え、身近なことからやってみようと思いを決意していました。



ひろしま子ども平和の集い



配布資料を読む様子



## 被爆体験者講話聴講

講師：梶本 淑子（かじもと よしこ）さん(93 歳)

講師プロフィール：当時 14 歳、爆心地より 2.3km の学徒動員中の工場で被爆。崩れた工場の下敷きになり足と腕が裂ける大怪我を負う。

「同じことを 2 度と繰り返してはならない」という思いで、証言活動を続け、核兵器廃絶の重要性を訴えている。

### 講話内容（概略）

梶本さんは、14 歳のころ、学徒動員中の飛行機のプロペラ工場で被爆しました。大きな音と共に目の前が真っ青になり体が浮き上がったところまで記憶していますが、気が付いた時には工場が崩れ下敷きになってしまいました。一緒に作業をしていた友人が生きていたことから、なんとか建物から出ようと這い出したが、足と腕が裂けるほどの大けがだったそうです。あたりは暗く静かで魚が腐ったような土のにおいが充満する中、これから火事になることを呼び掛け、怪我をして動けない友人を抱え逃げました。

自宅のある町は焼け残っていることが分かり、帰宅途中で父親と再会しました。しかし、梶本さんを探すために工場の焼け跡地を探し回った父親は、放射線を多く浴びたためか 1 年後吐血して亡くなったそうです。梶本さんご自身も、歯茎から出血し高熱を出すなどの被爆の後遺症が出ており、健康に不安を感じながら生きてきたそうです。

「多少貧しくても平和が良い」という言葉を強く訴えていました。



梶本淑子さんの話をもとに描いた絵

想像を絶するような体験談と私たちの心に訴えかけるような話しぶりに、派遣生は圧倒され、衝撃を受けている様子が見られました。時折涙ぐみながらも、梶本さんのお話を聞きながらしっかりメモを取り平和学習に繋げていました。

## 班別行動（広島平和公園周辺のフィールドワーク）

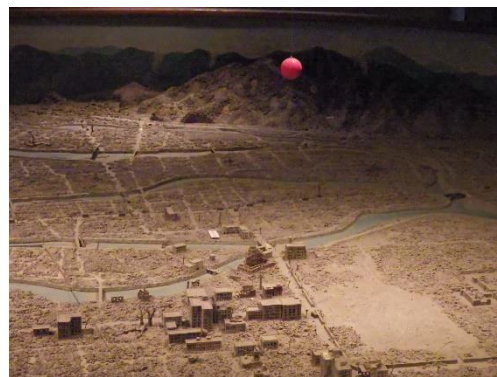
朝早くからの活動に加え、猛暑の影響もあり、派遣生に疲れた様子が見られたため、予定を1時間半後ろ倒しにして班別行動を行いました。休息を取り、暑さも少し落ち着いた中、3班それぞれ事前に調べておいた被爆遺構や資料館などを見学しました。

### 【A班の見学場所】

本川小学校平和資料館→広島城



本川小学校平和資料館



爆発時の広島の様子を再現した模型



広島城



被爆樹木のマルバヤナギ

### 【B班の見学場所】

本川小学校平和資料館→袋町小学校平和資料館



本川小学校平和資料館  
献花台前で手を合わせるB班メンバー



焼け焦げた配電盤





袋町小学校平和資料館



漆喰の下に今も残る伝言

【C班の見学場所】

広島城→広島逓信病院



広島城への移動中



広島城御門橋



中国軍管区司令部原爆慰霊碑



広島はくしま病院  
(旧広島逓信病院)

### 広島平和記念資料館見学

最終日は広島平和記念資料館を見学しました。実物展示や当時の写真・映像が多くあり、派遣生は真剣な眼差しで展示を見て回りました。時間が限られていたこともあり、「もっと時間をかけて見て回りたかった」などと、平和学習に意欲的な声も多く上がっていました。



広島平和記念資料館見学の様子

### 日立駅到着

定刻通りに無事に日立市へ到着しました。

帰りの道中では、少々疲れも見えましたが、全員が無事に研修を終えることができました。



無事に到着！

## 派遣生感想

### 私達にできること

助川中学校 3年 今橋 奈々



戦争。なんて悲惨なものなのでしょうか。

テレビのニュースなどでよく耳にするこの言葉。私は「自分にはあまり関係のないものだ」と思っていました。しかし、今回の研修を通して、戦争の悲惨さと平和のありがたみを心から感じ、自分ごととして考えるようになりました。

1945年8月6日午前8時15分、広島市上空に原子爆弾は投下されました。朝職場に出勤する人々や、建物疎開の作業をしていた子どもたちの生活が、一瞬にして奪われました。現在では考えられない事です。当時の人も想像していなかったことでしょう。

私は、広島平和記念資料館を見学して、創造をはるかに超えた衝撃を受けました。原子爆弾の熱線によって焼け、全身に火傷を負った多くの人や、被爆した子供たちが着ていたぼろぼろになった洋服、8時15分で止まっている時計など、当時の状況を伝える物を目の前にし、衝撃のあまり息を呑みました。また、私たちは被爆者の方からお話を聞きました。自分たちと同じ年代の子供達が被爆し、苦しい思いをしたと考えると、現在の当たり前にある生活はありがたいものなのだと感じると同時に、核兵器の恐ろしさを感じました。いま私たちが平和に暮らせているのは、被爆者の方が思い出したくもない記憶を多くの人に伝えてくれているからです。だからこそ、今度は私たちが伝えなければいけません。そのために、まずは、「学ぶこと」と「知ること」が大切です。戦争が起こってしまった経緯や背景を学ぶと同時に、核兵器の本当の恐ろしさを知る必要があります。次に、「伝えること」です。被爆者の方が伝えてくれたことを、私たちも同じように次世代の人に伝えることが私たちの使命なのです。そして、平和に暮らせる毎日に感謝し、一日一日をかみしめ、命を大切に生きていきたいです。



## 繋げる思い

平沢中学校 3年 木村 紗椰



私は、この夏の3日間で平和について多くのことを学んだ。今まで、平和について深く考えたことはなかった。平和であることは、当たり前だと思っていたからだ。でも違った。

今から79年前の広島でたった一つの原子爆弾により多くの命が失われた。その時の光景は私達には想像もできないものだった。

広島平和記念資料館では、目をふさぎたくなる、本当にこんなことがあったのか疑いたくなるような写真や絵、動画があり、今も忘れることができない。特に印象に残っているものは、皮膚が赤く焼けただれ、髪の毛も抜けている、もう男か女かわからない状態の人が布団に横になり、こちらを見ている写真だ。この写真を見た瞬間、逃げ出したくなった。人をこのような姿にする原子爆弾を今までにないほど、とても恐ろしく思えた。

実際に被爆した梶本さんの話を聞いた。梶本さんの話は、耳をふさぎたくなるような話ばかりで、涙が出てきた。戦争一色の国の中に生まれた梶本さんは、いつ爆弾が降ってくるかわからない日々の中で、自由もなく贅沢もできない暮らしをしてきたという。そんな暮らし、今ではあり得ないだろう。私たちが想像もできないような日々を過ごしてきた梶本さんの言葉は、重さが違った。心にグッとくるものがあった。話の最後に私たちは、梶本さんと約束を交わした。その約束とは「命を大切にしろ」というものだった。「1人1人に名前があり、家族とともに生きることができる。それで十分な人生じゃないか」と言われた。私は絶対にこの約束を守ろうと思った。どんなに辛いことがあっても、その辛さは戦争よりはマシだ。このことをよく心に刻んで生きていきたいと思った。

原爆の記憶が薄れていく中で、私たちが声を上げて行動を起こさないといけない。「忘れられた歴史は繰り返す」本当にその通りだと思った。この3日間で学んだこと、感じたことを周りの人に伝え、広めていくことが平和への旅に参加した私たちの使命だ。

原爆のない、戦争のない本当の平和のために私は行動していきたいと思う。

## 平和の尊さ

駒王中学校 3年 太田 采希



1945年8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が投下されました。投下されたその日から79年が経った今年の夏、私は広島を訪れ、平和記念式典に参列させていただきました。

広島では、被爆体験者からお話を聞いたり、平和記念資料館を見学したりして、原爆の恐ろしさを目の当たりにしました。原子爆弾の威力、被爆者を長く苦しめた放射線被害、耳を塞ぎたくなる、目を覆いたくなる、生々しさ。私の想像をはるかに超える惨劇で、気がつくとき涙があふれていました。

平和記念資料館では、戦争は二度と繰り返してはいけない、ということを写真の中の被爆者から訴えかけられたような気がしました。写真には、爆撃で皮膚が焼けただけ、病気になり、食べ物もなくなり、生きる気力がなくなっている様子が何枚も何枚も写真に収められていました。被害を受けたのは、被爆者だけではありません。被爆者の家族も同じように苦しみ続けました。大切な家族が亡くなる、もう元の日常には戻れなくなる、その苦しみや悲しみは私では筆舌に尽くしがたいものだと感じました。そしてそんなに苦しみや悲しみが大きいと、私だったら思い出すだけでもつらく、とても人に話そうなどとは考えられないと思います。しかし、被爆者やその家族の方々は、そのような苦しみを長い間語り継いできました。だからこそ、あれから79年もの間、日本では戦争が起きていないのだと思います。

私は今回「平和への旅」青少年派遣事業に参加して、戦争のような争いがなく、人々が安心して暮らせること、平和に暮らしている今の生活がどんなに大切なものかということに身染みて感じました。戦争や核兵器の恐ろしさを多くの人々に知ってもらいたいと考えると同時に、私自身もっと深く考えるべきだと思いました。そのために、今回の派遣事業で学んだことをしっかりと胸に刻み込んで生きていきたいです。

最後に、このような機会を与えてくださった方々に感謝します。ありがとうございました。

## 平和とは

滑川中学校 3年 大森 琉生



私は、原爆や戦争の本当の恐ろしさについて分かっていませんでした。そう感じたのは、今回「平和への旅」に参加して、原爆に関するたくさんのもを実際に見たり、話を聞いたりしたからです。

今回の「平和への旅」の中で最も印象に残っているのは、被爆者の方のお話です。急に目の前が光った時、走馬灯のように家族の顔が浮かんだこと。多くの人たちが倒れている中、死体の上を歩いたこと。亡くなった方たちの死体を運んだこと。そして何より、大切な人と会えなくなってしまったこと。それらは、どれも辛いものだったそうです。被爆者の方は、このような体験を、「苦しい」「助けて」「怖いよ」と思っていたそうです。私はこれらのお話を聞いて、原爆や戦争がどれほど恐ろしいものなのか、考える時間になりました。

また、広島平和記念資料館では、実際に被爆した方々の情報や、当時被害にあった焦げた服、原爆によって壊れた石の破片などが展示されていました。どれを見ても、原爆がどのようなものだったのかが伝わってきました。原爆ドームなどの建物には、実際に触ることができました。もとの形を保っていたものは、ほとんどありませんでした。原爆一つでこんなにも大きな被害がもたらされたのかと、実感することができました。

今回の「平和への旅」を通して、命の尊さや、平和とは何かについて、少し分かったような気がします。戦争や原爆は、命や町だけでなく、人々の想いまでをも奪うものです。今日本が平和であることは、当たり前のことではありません。平和とは、原爆や戦争の辛い経験を多くの人に伝えたり、広げたりしていくことで作られていくのだと思います。私も、今回の「平和への旅」での経験を伝え、つなげていく一人になりたいと思います。

## 「平和への旅」を通して学んだこと

多賀中学校 3年 菊池 瑛太



私は「平和への旅」青少年派遣事業で広島を訪れ、原爆が落とされたときの恐ろしさや被害の様子を肌で感じました。

特に印象に残っているのは、被爆体験講話で見た絵です。それは、講師の梶本さん自身が被爆直後の様子を描いたもので、被災した人が人ではなくゾンビのようでした。体全身が燃え、皮膚が剥け、筋肉が露出している状態なのです。この絵から原爆の恐怖やすさまじい威力が伝わってきました。

また、被災した時に身に着けていた衣服や水筒、帽子などの実物を見たことも、心に焼き付いています。衣服はボロボロに焼けて穴だらけで水筒や帽子にも穴が開いていました。階段に、人が座っていたことが分かる影が残っていたことから、原爆の悪魔のような破壊力が分かり、恐怖を実感しました。

また、ガイドさんから、原爆で被災した建物についての詳しいお話を聞くことができました。「広島県物産陳列館」という大きく立派なお店は、とても綺麗で、いつも多くの人でにぎわっていたそうです。しかし、原爆を落とされてしまったことで、明るい人気スポットは、悲劇の場所になってしまいました。当時、中にいた人はもちろん周辺にいた人も原爆の犠牲者となってしまったのです。それが今、「原爆ドーム」として当時の惨状を人々に伝えている建物だと改めて知りました。

今回、広島を訪れて、被災した人々の無念な気持ちを感じ、以前より深く理解することができました。そして、このことを自分以外の人にも知ってほしいと思いました。

そのためには、自分が感じてきたことを身近にいる家族や友達、親戚などに伝え、さらにより多くの人に伝えられるように行動していきたいです。

最後になりますが、日立市文化・国際課の皆様、この事業に携わっていただいた皆様、大変貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

## 平和な日常が未来まで続くように

大久保中学校 3年 寺山希々花



たった今この場所に、原子爆弾が落とされたらどうなるのだろうか。

誰も想像しなかっただろう、平和な広島に1つの原子爆弾が落とされるなんて。

1945年8月6日午前8時15分原子爆弾が投下され、広島の平和な日常を灰色の世界へと変えてしまいました。弁当を楽しみに建物疎開に出かけ、食べることなく息を引取った子、三輪車が大好きで乗っていて被爆し息を引取った子。私たちと変わらない年齢の子たちは、建物疎開に出かけ多くの子が被爆し、誰か分からないほど、やけどで顔の皮膚が膨れ上がったそうです。

私は、8月6日広島平和記念式典に参列した後、被爆体験講話を聴きました。被爆体験講話では、被爆者の梶本淑子さんから話を伺いました。

梶本さんは未だに被爆体験の話をするかどうか迷うそうです。原子爆弾が投下された日、たくさんの人が「助けて。助けて。水をくれ。」と梶本さんに手を伸ばし、助けを求めてきました。でも、梶本さんは自分が生き延びるためにその手を振り払い、たくさんの死体の上を、追ってくる火の手から逃げたそうです。被爆者が原爆について語れない理由に、助けを求めた人の手を振り払い、自分の命を優先した罪悪感があるため語れないそうです。でも、梶本さんは悲惨な出来事を未来に伝えるために話すそうです。

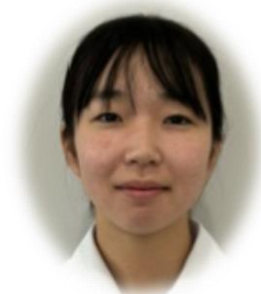
お話を聞いている中で特に印象に残っていることが、広島に原爆が落とされた理由です。広島は北側に山、反対側に海があり、空襲による被害が少なかったため、原爆の威力を調べるのに適していたからだそうです。私は、威力を調べたいというだけの理由で原子爆弾を落としたことに怒りを覚えました。

研修を終えた今、以前と私の中で変わったことは、平和に対する思いです。原爆が投下され、多くの人が亡くなり、多くの人が苦しんでいます。

2度の原爆を経験した今の日本は平和に対する取組みが多いと思います。ですが、ほかの国では核兵器を持っている国もあります。この先の平和な未来が末永く続くように、今回の貴重な経験を生かし、原子爆弾や、戦争の恐ろしさをたくさんの人に伝えていこうと思いました。

## 平和の実現に向けて

河原子中学校 3年 羽成 優奏



「戦争は恐ろしく、平和は尊い」。そんな漠然としたイメージで、現地・広島へ訪れた私は、遺されたものを前にして、言葉を失いました。原爆投下から 79 年がたった今でも漂う重苦しさを直に感じたことが、強く印象に残っています。半壊した原爆ドーム、亡くなった方々の言葉や写真、黒焦げの遺品。実際に見るからこそ込み上げてくる様々な感情がありました。また、お話をしてくださっていた現地の方々の目は真っ直ぐ過去と未来を見据えていて、言葉のひとつひとつが力強く心に響いてきました。被爆を経験した方々は当時を「地獄」だったと仰っており、資料で当時の様子を学んだ私も、紛れもない「地獄」だと思いました。そしてその地獄はまるで「呪い」のように変わり、今でも被爆者の方々を差別や偏見、後遺症で苦しめています。あのたった一瞬の出来事が、何十年、何世帯にも渡って人々を痛めつけることを知り、研修前の自分の浅はかな考えを恥ずかしく感じました。

ふと、戦争の本当の恐ろしさや平和とは何かを知っている人はどの位居るのかと疑問に思います。私が研修を経て分かったことで、「授業やメディアで伝えられるのは、ほんの一部でしかない」ということがあります。海外だけでなく日本でも、どこか他人事に感じている方、「知らない、詳しくはわからない」方が多いと思っています。しかし現地には、ガイドさんのお話を真剣に聞かれる海外の方々も見られました。「知る、知ろうとする」ことが平和への第一歩であり、全世界の人が「行動を起こす」ことで平和が実現されるはずです。知ることが出来た私は、それらを取り零すことなく周囲、後世に語り継いでいきます。

私は、研修前に原爆の恐ろしさ、戦争の憎さ、平和の尊さを知った気になっていたことを反省したと同時に、研修に参加させていただき、多くの学びを得られたことを心からありがたく感じています。このような機会を設けてくださった関係者の方々、本当にありがとうございました。



## わたしの平和

泉丘中学校 2年 丸山 琴音



1945年、8月6日午前8時15分。たった一発の原子爆弾で多くの人々の人生を奪った。なぜ、戦争が起こったのだろう。平和とは、一体何なのだろう。私は、今回の旅に参加して多くのことを学んだ。

広島では、たくさんのものを見た。資料館では、私達と同年の子供のぼろぼろになった服や、かばん、真っ黒に燃やされたお弁当などがあった。他にも、皮膚が焼けて目が見えない人、骨が見えてしまっている人などの写真を見た。本当に今、私が暮らしている日本なのかと疑ってしまうほど、残酷で辛く、もう二度と見たくない姿だった。また、被爆者の梶本さんのお話も聞いた。当時中学生だった梶本さんは、働いていた工場で被爆された。気づいたら、暗い場所で下半身は建物の下敷きになっていて、手、足、頭から血はだらだら。もっと勉強したかったと諦めかけていたところを友達と走って逃げたと話していた。その後も、水を求める人、飲むとショックで死んでしまう人もいたそう。私は、とても衝撃的で信じたくなかった。でも、これが本当に現実であったことを思い知らされた。

次に、中高生の平和の取組み発表を聞いた。各中学校で、生徒会全員で平和に向き合った考えや、広島市と協力をして、募金活動をした結果を発表していた。これを聞いて私は、自分にできることはたくさんあり、どの学校の取組も無力ではないことに気づいた。

私が今夏の旅で学んだことは、絶対に目を背けてはいけないことだ。

「忘れられた過去は必ず繰り返す」

このような過去をもう二度と繰り返さないために、未来の若者に私たちが伝え続けたいといけな

一秒でも早く、平和であることが当たり前と感じられる平和な明日に繋げるために。



## 平和の大切さと原爆の恐ろしさ

台原中学校 3年 前田 凌助



8月5日から7日の3日間、私は「平和への旅」青少年派遣事業で広島を訪れ、原爆ドームの見学や広島平和記念式典に参加しました。この経験を通して、私は戦争の恐ろしさや平和の重要性について深く考える機会を得ることができました。

平和記念公園では、ガイドの方から原爆投下当時の状況について詳しく教えてもらいました。原子爆弾が原爆ドームの真上で爆発し、その爆風でドームの柱が1メートル吹き飛ばされたと聞いたときは、戦争の破壊力を実感しました。また、「平和の灯」が「すべての原子爆弾がなくなったときに消える」というお話は、平和への願いが今も続いていることを象徴しており、とても印象的でした。

「ひろしまこども平和の集い」での被爆者体験講話では、被爆者の女性のお話を伺うことができました。女性は、中学生の頃、工場で働いている際に原爆の爆風に巻き込まれ、がれきの下敷きになり、目を覚ますとその前に広がっていたのは、うめき声や負傷者であふれた地獄のような光景だったと辛い体験を語ってくださいました。直接体験者から話を聞くことで、当時の恐怖や絶望をよりリアルに感じられました。

広島平和記念資料館では、原爆投下の瞬間を再現した映像や、焼き焦げた物の展示、全身を焼かれた人々が放射線の影響で変り果てた人々の写真などがありました。衝撃的で目を背けたくなるものでしたが、これらは事実であり、直視しなければならないものだと感じました。

私は、3日間の視察を通じて、戦争の悲惨さを学びました。これからは、この学びを周囲の人々にしっかりと伝え、平和の大切さを共有していきたいと強く決意しました。

## 曾祖父の願い

日高中学校 3年 樫村 拓哉



私の曾祖父は戦争で命を落とした。曾祖父の弟は生き延びることができ、戦争の話を聞くと

「今は平和でよかった。」

といつも話す。その理由はなぜか、曾祖父の弟にとって平和とは何か、それを知るためにこの研修に参加した。

広島ではたくさん話を聞いたり、被爆した建物を見たりした。ガイドさんは原爆の悲惨さについて説明してくれた。私が行った日の広島はとても暑かったが、原爆の熱さはその比ではないと知り驚いた。また広島平和記念資料館で、溶けたガラスや被爆された方の物語を知った。私はこの3日間、何を見ても聞いても驚き、広島で起きたことが信じられない思いであった。

原爆が落とされた日から79年がたった。現在の広島はあの時の広島と比べて別の場所のように感じる。建物が多く建てられ、人がにぎわっている。綺麗な水もたくさん流れている。広島はあの日から想像できない復興を成し遂げている。広島は再びあのような悲劇を繰り返さないように努力を続けている。どうしたらあの過ちを繰り返さないのだろう。その答えは被爆された方の体験談を聞き、分かった。その方は、

「忘れられた歴史は繰り返す。」

とおっしゃった。もし後世の私たちが広島や長崎に原爆を落とされたことを忘れると、また過ちが繰り返されてしまう。この言葉は私の心に響いた。

私の曾祖父の弟はなぜいつもあのように言っていたのか分かった。兄が戦争で亡くなった悲しみともう二度と繰り返してほしくない気持ちがあるのだと思う。私はこの3日間広島で体験したことを、さまざまな人に伝えていき、忘れずにこの歴史を繰り返さないようにしたい。曾祖父の願いを大切にしたい。

## ヒロシマを学び、感じた夏

豊浦中学校 3年 坂東 陽



肌に突き刺さるような真夏の暑さの中、私は広島の地を訪れました。

広島に到着し、路面電車で揺られてまず向かった先は原爆ドームでした。初めて目の当たりにした原爆ドームは圧巻の迫力でした。写真や映像では何度も見たことがあったものの実際に目にすると真っ青な空を背景に静かに佇む姿は圧倒的な存在感でした。この建物を一瞬でこのような姿にした原爆の威力。原子爆弾が投下されたことで広島は一瞬にして色を失い灰色の世界になったそうです。

私たちが当たり前前に平和に暮らしている一方、世界のどこかでは人々が戦火に追われ、今この時も命を奪われています。今なお核兵器は製造され続け、何十年も何百年もいつもどこかで戦争が続いているのが現状です。いつなんどきまたあの恐ろしい過去が繰り返されるかもしれないという恐怖は常に私たちの隣にあるのです。

平和記念式典の挨拶でこんな文言がありました。「願うだけでは、平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。～中略～さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。」

私は今回の広島への研修を通して、平和のために一つ行動に移せたのではないかと思います。戦争の情報を机上で学ぶだけではなく、実際に広島を訪れ、行動し、自分の目で、耳で学ぶことができたからです。79年前の悲劇、恐ろしい過去。経験した人々は年々減ってきています。だからこそ私たち若い世代が行動しなければならないのです。

平和記念公園の中には「平和の灯」があります。この火は1964年8月1日に点火されて以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核悲願の象徴となっています。私はこの火が消えるところを自分自身の目で見届けることができることを強く願っています。

## 「平和」とはなんだろう

久慈中学校 2年 小林 幸太郎



ごはんを食べること、学校に行くこと、家族や友達と楽しく話をすること、これらのことを僕は当たり前のことだと思っていた。広島に行くまでは。

1945年8月6日、午前8時15分。広島に原子爆弾が投下された。

それから79年がたった今年の8月、3日間に渡って「平和への旅」で僕は広島を訪れた。

そこで僕は被爆経験者の人の話を聞いたり、当時の様子を見学したりした。

被爆経験者の人から聞いた話は、想像するだけでも恐ろしく、耳を塞ぎたくなるようなものばかりだった。死体がたくさん転がっていて、その上を踏んで歩いてもなんとも思わなかった、という話に戦争は人間の心まで崩壊させてしまうのだと、恐怖を感じた。

平和記念資料館や国立原爆死没者追悼平和祈念館、原爆ドームなどを見学した時には、ボロボロになった衣服や高熱で変形した日用品、大やけどを負ったり、斑点がたくさんできたりしてしまった人の写真など、この世界のものとは思えないようなものがたくさん展示してあった。どれも原子爆弾の威力と悲惨さがよくわかるものだった。

この旅で出会った人に、「8月6日だけではないんだよ」と言われた。確かに原子爆弾が投下されたのは8月6日だが、人々が苦しんだのも、亡くなったのも8月6日だけではない。そして何より、今も被爆の後遺症で苦しんでいる人がたくさんいることを僕は教えてもらった。被爆した人、その後遺症に苦しむ人たち、被爆を伝えてきた人たち全員が、平和な未来をつくるために核兵器廃絶のための活動をしたり、ずっと被爆のことを伝え続けてきたりした。

だが、平和記念資料館内にある地球平和監視時計では、世界で最後に核実験が行われてからたった85日しか経っていないことが示されていた。まだこの地球には核が残っている。そして、世界ではいまだに戦争が続いている。

あの日のたった一発の原子爆弾によって広島の人々の日常は奪われてしまった。

僕は「平和」というのは、毎日をいつも通りに安心して生活できることだと広島に行って感じた。

今、世界はまだまだ平和だとは言えない。これからできるだけ早く平和な世界を実現するために、被爆のことを知り、平和について学んだ僕たちがたくさんの人に伝える、それが使命だと考える。そして、私自身も、この当たり前で、幸せな日々をかみしめていきたい。

広島での貴重な体験により、核をなくす重要性、平和がどれだけ大切かを実感した。

## 「平和への旅」を終えて

坂本中学校 3年 津田 寛太



「言葉を失った。」

広島平和記念資料館を見学し、原爆体験者の方の話を拝聴し、体感したことでした。

平和への旅を終えて、平和は当たり前にあるものではないのだと、強く思いました。人間一人一人の平和を願う気持ちの積み重ねでもたらされるものなのです。私は、今回の旅を通して、平和に対しても、戦争に対しても、考えが180度変わりました。なぜなら、自分の目で見て、肌で感じてきたからです。

私は今まで、「平和とは何なのか」ということを、本当の意味で理解できてはいませんでした。社会の授業で、戦争の歴史については学んでいます。しかし、今回の体験は、教科書に載っていないことを私に教えてくれました。

原爆体験者の方の話を伺う機会を得ることができました。衝撃でした。涙を押さえることができませんでした。その方が14歳の夏、目の前には多くの人の死体が広がっていたそうです。亡くなった人々の上を越えて、死体をいくつも運ぶ…。私は、目の前が真っ暗になり、気持ちが激しく動揺しました。その方が今の私と同じ年齢の頃、79年前の夏に広島で体験したことは、まぎれもなく、この日本で起きたことなのです。

「戦争や原爆について知る。学ぶ。これが平和を考えるための最初の一步です。その知識を周りの人に伝えてください。」と、原爆体験者の方は仰っていました。私は、言葉にならなかったあの時の感情と向き合い、少しでも自分の周りの人達に、戦争や原爆の恐ろしさを伝えていけたらと思います。今回は、普段体験できない貴重な体験をすることができました。私の考えや世界観を広げてくれたこの思い出を、今後も大切にしていけます。ありがとうございました。

## 平和への旅は終わらない

中里小中学校 3年 菊池 眞子



私は、「平和への旅」で広島県を訪れた。戦争はどのように怖くて、悲しいものなのか、実際の状況はどうだったのか、肌で感じて深く知ることができ、心が突き動かされる光景ばかり見た。今年の8月6日は79年前と同じ暑く晴れた日だった。私はあの日と同じ場所で同じ時間にいることに恐怖や緊張感を感じていた。

広島平和記念資料館で一番始めに見た大けがを負っている女の子の写真。私が実際の原爆によって被害を受けた人の写真を見るのは初めてだった。怖くて今まで目をそらしてきたが、今はしっかり目に焼き付けて原爆の悲惨さを知ろうと思った。写真の女の子の表情から伝わる悲しさ、悔しさ、辛さ。戦争の悲惨さを真っ向から感じた。幸せを奪った戦争を二度と起こしてはいけないと強く思った。

そして、被爆体験者の梶本淑子さんのお話を聞いた。梶本さんは当時14歳だった。原爆が落ちた後、広島はまさに地獄だったそうだ。原爆が落ちて約14万人が一瞬で亡くなった。放射線が降り注ぎ、最初は元気だった人も若いうちに亡くなってしまったり、今も沢山の方が病気により苦しんでいたりする。だから戦争は終わった話ではないと思った。梶本さんは「今、世界に核爆弾は約12,520個ある。この戦争を忘れられたら、また繰り返してしまう。忘れないために声を上げて行動に移すことが大切。」と話していた。私は、世界にこんなにも大量の原子爆弾があったことも知らなかった。それを使わせないためにどうしたらいいのかをよく考えようと思った。しかし、世界で起こっている戦争を、私がとめることはできないのがもどかしい。けれど、私はあきらめない。なぜなら、私は広島に行って戦争のことを学んできたから。

私は、この戦争を知って平和を願うだけに留まらずに、私が学んできたことを伝えて行動し続けることが、私の使命だと思った。広島で生きたいのに生きられなかった人たちが見たかった未来に、私たちは生きている。



## 「平和への旅」に参加して

十王中学校 2年 妹尾 洸汰



僕は、8月5日から7日の間「平和への旅」に参加し、広島を訪れました。

そこでは、広島の大爆による被害やその当時のことについてたくさん学びました。

原爆資料館では、実際に使われていた洋服や、大爆の熱風により、崩れ溶けてしまった建物の破片、その当時の様子をイメージして描かれた絵など、目をふさぎたくなるような内容のものがたくさん展示されていました。今でも見るのがつらいような光景が広がっていたと考えると、その当時、広島は本当に地獄のようだったのだと思いました。

被爆者の方からは、被爆した当時一緒にいた友達や親戚の方が目の前で死んでしまったりしても、自分のことに精一杯で、ほかの人の遺体も踏みながら進んでいったという話を聞き、当時生きていた人は本当に苦しい思いをしていたのだと思いました。また、1日目に行ったフィールドワークの時にガイドさんに教えてもらったことを思い出しながら聞く原爆体験者の聴講では、その時の情景や当時生きていた人の心情などが想像しやすく、講話の内容もとても恐ろしく生々しい表現が多かったため印象に残りました。その中でも特に印象に残ったのは、戦争をしていた当時の生活についてです。

まず、今とは違い、中学生も工場で働き、戦争に使う武器や道具を作っていたと聞いて、自分と同じくらいの年齢の人が毎日学ぶのではなく戦争に使う兵器を作り、自らがしたいことや、自分が思ったことも制限され、「国のために」とだけ言われて働かせられていたことを考えると、今の自分たちがどれだけ平和に暮らしており、どれほど恵まれているのか、幸せなのかということを改めて見つめなおすことができました。

今回の旅では、大爆について学び、被爆者後世に伝えることが難しくなっているということも学びました。そのため、戦争という過ちを繰り返さないために、これからは私たちが戦争について語り継ぎ、行動していきたいと思いました。



## 平和の尊さを感じて

日立第一高等学校附属中学校

3年 関根 陽菜



私はこの旅を通して、日常の中にあふれる「あたりまえ」がとても尊いものだと、肌、耳、目、そして心で感じました。そこでは、心に深く感じるものがありました。

まず、私達は被爆された方のお話を直接伺う「ひろしま子ども平和の集い」に参加させていただきました。そこでは、原爆直後のお話を詳しく知ることができました。話をしてくださった梶本さんは、当時私達と同じ中学3年生で、被爆したときは、戦争で使用するヘリコプターの羽を工場で作っていたそうです。いつも通りの作業をしていると、急に工場の窓ガラスに青い光が走り、一瞬にして地獄絵図に変わってしまったとおっしゃっていました。友達は何人も死んでしまって、「もっと勉強がしたかっただろうに」「お母さんに会いたかっただろうに」といたたまれない気持ちになったそうです。梶本さんは、「辛いこともあると思うけど、とにかく命を大切にしてほしい。」と熱いメッセージを送ってくださいました。私はこの講演を聞いて、涙を止めることができませんでした。そして、普通に生活できているのがどれだけ尊いことなのかを、強く実感しました。

次に、広島平和記念資料館を見学しました。そこには、被爆を受けてしまった人の写真や、多くの物が展示されていました。そこには変形したガラス瓶、焼け焦げた着物の切れ端、穴が空いてボロボロの洋服など、原爆の悲惨さを物語る品々があり、胸が苦しくなりました。特に印象に残ったのは、数々の時計です。その時計はいずれも、午前8時15分付近を指して止まっていました。言葉では表すことのできない切ない気持ちになりました。

私は、この「平和への旅」で多くのことを学びました。そして、戦争や、核兵器使用という悲劇を繰り返させないために、このことをより多くの人に伝え、広げていきたいと思います。私達が平和を訴える声は、ものすごく小さく、無力なものかもしれません。しかし、その小さな声で伝え続ければ、その声が積み重なり、より多くの人に、そして世界中に伝わると、私は信じています。

## 広島から平和を世界へ

茨城キリスト教学園中学校  
3年 鈴木 悠華



私は、平和への旅に参加できたことに大変意義を感じています。世界で初めて原爆を落とされた被爆地である広島から学び、この先をどのように生きていくべきか考えました。

私たちが広島平和記念公園を訪れた時、いかなる時も燃え続けている炎を見ました。それは、平和の灯といい、世界から核兵器がなくなるまで燃え続けるのだと聞いた時、核兵器の恐ろしさを知っているのに、未だに世界にはなぜこんなに核兵器が存在するのだろうかという思いと、平和を実現するという言葉の難しさと重みを感じました。

また、広島平和記念資料館で見た 79 年前の広島の様子にとっても衝撃を受けました。それは、道端に倒れ、体からウジ虫が湧いている無数の死体でした。他にも皮膚が溶け、大腸が丸見えになっている、目を背けたくなるような悲惨な写真も多くありました。今のように、路面電車が走り、飲食店が多く立ち並ぶ広島と同じ街とは思えないような様子でした。

そして私は、被爆者の方が講話の際「命を大切に、忘れられた歴史は繰り返す」という言葉が忘れられません。戦後 79 年という長い時を経て、戦争を体験した人は日々減っています。その中で、聞くことのできた貴重なお話を後世へと伝え続けることが大切だと思いました。

21 世紀になった今日でもなお、核兵器は世界中で保持され、もしも使用されれば科学の進歩により、さらに大きな被害がでてしまう脅威に、人類はさらされています。私は資料館を訪れ、同じ人間とは思えないような姿を見た時の驚愕が忘れられません。このような光景が、また繰り返されてしまうのかもしれない今日の国際情勢に、危機感を覚えています。これから生きる私たちが、核兵器の使用を阻止しなければいけないと思うとともに、二度と世界に戦争で傷つき、人間の尊厳を脅かされる人がでないよう願ってやみません。

## 「希望の輪」を広げるために

駒王中学校 教諭 佐藤 良子

この度、「令和6年度『平和への旅』青少年派遣事業」に帯同することになり、日立市の中学校の代表である生徒とともに、多くのことを学ばせていただき、貴重な経験となりました。

8月5日(月)から7日(水)までの3日間にわたる広島での現地研修では、平和記念公園周辺を碑めぐりガイドさんのお話を聞きながら回ったり、平和記念式典に参列したり、平和記念資料館の見学や、フィールドワークで広島の町中の散策、ここでしかできない経験をするなかで、たくさんの学びがありました。人生で初めて足を踏み入れた「ヒロシマ」は、戦後の復興とともに新しい都市として発展し、近代的な建物が立ち並んでいました。交通面でも、路面電車（通称「広電」）が町中を走る様子や、電車の車窓から見る町並みに対しても、大きな魅力を感じました。その一方で、平和記念公園や平和記念資料館、原爆ドームなど、原爆の恐ろしさ、そして平和の大切さを感じることができる場所や建物がたくさんありました。実際に原爆ドームを見たときには、何とも表現しがたい存在感に圧倒され、これが原爆の恐ろしさなのだ、二度と戦争を起こしてはいけないと、そこにある現実から目を背けてはいけなかったと思います。

現地研修を終えて約2週間後に日立で行われた最後の研修は、活動報告を班ごとにまとめ、発表するものでした。これまでの研修で得た知識と、現地に出向いて感じたことや学んだことを自分の言葉で発表する生徒たちの姿からは、平和への祈りをしっかりと受け継ごうという使命感が垣間見られました。

平和記念式典の「平和宣言」で、広島市長の松井一寛氏は、「次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと『友好の輪』を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、『希望の輪』をひろげていただきたい。」と語りました。この「平和の旅」で学んだこと、感じたことを、参加生徒、引率者全員が、自校での発表をはじめとしたさまざまな機会に語っていくことで「友好の輪」を広げてほしいと思いました。こうした行動の一つ一つが、「希望の輪」が広がるきっかけになると信じ、平和を強く願い続けたいと心に誓いました。

最後に、今回このような有意義で貴重な機会を設けてくださった関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



フォトギャラリー（研修の思い出）









## 広島・長崎への原爆投下

1945（昭和20）年8月6日、ウラン型原爆「リトルボーイ」を積み、南太平洋のテニアン島にある米軍基地を出発したB29 エノラ・ゲイ号は、午前8時15分、広島上空から人類史上初の原子爆弾を投下しました。

原子爆弾は、広島市中心部、現在の原爆ドーム前方の地上約580mの空中で爆発。1秒後に最大直径280mとなった「火の玉」は、5,000℃の高温に達したと推定され、強烈な熱線と爆風で人々を殺傷し、街を壊滅させました。原子爆弾が爆発した時の、ものすごい光と音から、被爆した人々は、後に原子爆弾のことを「ピカドン」と呼んでいます。爆心地から2km以内はすべての建物が瓦礫となり、生き残った人はほとんどなく、4km以内の建物が破壊される大惨事となりました。死者は年末までに約20万人、市民の約4割が悲惨な死をとげたほか、多くの被害者が生涯後遺症で苦しむことになりました。

広島に原爆が投下された3日後の8月9日午前11時2分、2発目の原子爆弾が長崎に落とされました。

プルトニウム型原爆「ファットマン」を積み、同じくテニアン島を出発した米軍機B29 ボックス・カー号は、北九州の小倉を第1目標にしていたのですが、当日の小倉上空は前日の八幡爆撃による煙やもやが立ち込め、肉眼による目標地点の確認ができなかったため投下を断念し、第2目標の長崎に向かいました。長崎上空も厚い雲に覆われていましたが、一瞬雲の切れ間が見えた午前11時2分、原爆を投下しました。

プルトニウム原爆は、一瞬のうちに多くの人命を奪い、全市の約36%を破壊。その年のうちに、74,000人もの人が亡くなりました。長崎に投下された原爆は、広島の前爆と比べて約1.5倍の威力があるとされていましたが、周りを山で囲まれていたため、熱線や爆風が山によってさえぎられ、被害は浦上地域に集中しました。市中心部に投下されていたら、被害は広島を超えていたと推定されます。



原爆投下後の爆心地周辺の様子  
(写真：広島平和記念資料館所蔵)



焼け野原になった長崎市街地  
(写真：長崎原爆資料館所蔵)

### 【広島と長崎の被害状況の比較】

項 目	広 島	長 崎
人 口	約 350,000 人	約 240,000 人
死 者	約 140,000 人 (誤差±10,000 人)	73,884 人
被爆前の建物数	76,000 戸	(約 51,000 戸)
建物被害（全焼・全壊）	62.9% (約 47,800 戸)	22.7% (約 11,600 戸)
建物被害（全壊）	5.0% (約 3,800 戸)	2.6% (約 1,300 戸)
建物被害（半壊・半焼・大破）	24.0% (約 18,200 戸)	10.8% (約 5,500 戸)
合 計	91.9% (約 69,800 戸)	36.1% (約 18,400 戸)

(参考資料「広島原爆被害の概要」、「戦争とくらしの事典」、「平和ナガサキ」ほか)

## 参考 日立が受けた戦災

太平洋戦争末期の1945(昭和20)年、日立市は軍需工場地帯ということもあり、他の地方都市には例のない連合軍からの3度にわたる大規模な攻撃を受けました。

### 【6月10日 1トン爆弾攻撃】

6月10日、日立製作所日立工場(海岸工場)に向けて、100機を超える米軍機B29から1トン爆弾の攻撃を受けました。508発(米軍記録では806発)もの1トン爆弾は、日立工場(海岸工場)と工場周辺の相賀町などに投下され、従業員と一般市民合わせて886人のかたが亡くなりました。



1トン爆弾攻撃で黒煙をあげる日立製海岸工場  
(写真：工藤洋三さん提供)

### 【7月17日 艦砲射撃】

7月17日の深夜には、米軍第3艦隊の戦艦など16隻が日立沖に現れ、20分余りにわたって艦砲射撃がありました。日立工場(山手工場)、電線工場、多賀工場、日立鉱山の精錬所に向けられた砲撃は、悪天候のため砲弾の大部分が市街地で炸裂し、民家に多くの被害がありました。

また、十王町櫛形村(現十王町)においては、7月17日午後11時過ぎ、高萩沖海岸からの艦砲射撃を受け、村内に着弾、死傷者を生じるに至りました。

### 【7月19日 焼夷弾攻撃】

7月19日深夜、127機の米軍機B29が市街地に向けて13,900発もの焼夷弾を無差別に投下しました。まちは火の海に包まれ、旧日立市の市街地の6割以上が焼失しました。

また、焼夷弾攻撃は、日立から北上する形で行われ、小木津、川尻、伊師浜、伊師町、磯原、高萩の順に投弾されたため、十王町の伊師浜では6割の住宅を焼失し、伊師町(当時)にも被害が及びました。

### 【戦災による被害の状況】

項目	旧日立市	旧多賀町	合計
死者	1,354人	185人	1,539人
行方不明	38人		38人
罹災戸数	14,740戸	585戸	15,325戸
罹災者	73,028人	2,622人	73,650人

※昭和20年6月～7月の三度にわたる大規模攻撃による被害

このほか、7月19日の攻撃で、旧豊浦町で死者12人、全焼家屋434戸、旧久慈町で死者14人、旧日高村で死者7人、旧坂本村で死者6人の犠牲者と被害がありました。

(資料・出典「日立戦災史」「図説 十王町史」)



令和6年度「平和への旅」青少年派遣事業報告書

2024（令和6）年12月発行

編集・発行 「平和への旅」青少年派遣事業実行委員会  
（事務局 日立市生活環境部文化・国際課）

連絡先 〒317-8601 茨城県日立市助川町1丁目1番1号

TEL 0294(22)3111 内線 595

FAX 0294(24)5301

Email [kokubun@city.hitachi.lg.jp](mailto:kokubun@city.hitachi.lg.jp)